

ハーディ小説の文体的特徴
“Far from the Madding Crowd”及び
“The Return of the Native”を中心に.

佐藤 孝

Some Stylistic Features of Thomas Hardy's Novels

Takashi SATO
(昭和57年10月30日受理)

This essay is a stylistic approach to the linguistic features of Thomas Hardy's novels, mainly with reference to the style of 'The Return of the Native' and 'Far from the Madding Crowd'.

Critics of Hardy's novels have generally recognized the Immanent Will motif, and have pointed out the conflict between the Will and human beings. On the other hand, the structural features of his novels have not generally been recognized by critics, though structure is a dominant factor in creating the underlying ideas of the novels.

The present writer tries to make a careful examination of the style of Hardy's novels and discusses linguistic construction and devices which are responsible for creating his own imaginative world. As Hardy proceeds to different aspects of his major themes in each novel, the methods he uses to convey the themes are appropriately altered also. In the above-mentioned novels he uses such devices as outer description, contrast, and strangeness of metaphors and similes to keep the readers' imagination active and give unity to the structure of the novels.

1

Hardyの小説構成に対するM. ProustとD. H. Lawrenceの評価は軌を一にするところがある。特にD. H. Lawrenceは‘Jude the Obscure’を‘Tess of the D' Urbervilles’の焼き直しとし、更にこの二作品共にClym Yeobrightの過失が繰り返えされているとしてHardyの小説家として信念に疑念を抱く。この評価は大沢衛氏の(ア)学問、宗教に対する幻滅、(イ)自然対社会慣習、(ウ)極限下に於ける人間疎外、(エ)近代文明と故郷喪失という4つの系列に於けるHardy文学の不条理の細部にわたる論究に結びつくものである。

Hardyの小説を徹底的に‘tentative’な思考法による作品であるとする読み方が提唱されて、内部連環の面から再認識する研究が進められると、‘Under the Greenwood Tree’と‘The Return of the Native,’ ‘The Mayor of Casterbridge’と‘Far from the Madding Crowd’というようにrepetitiveな緒相

で把握されてきた作品が牧歌的慣習に色どられたロマンの、喜劇的な型や、皮相的な悲劇的な型の靴いを脱ぎ捨て、‘the desire to alter or retrieve things past but hopeless’という作家Hardyの強い意欲が中心に捉えられることになる。単なるrepetitiveな作品群でなく、repetitive symmetryの中に作家の意図、意識を追求する試みである。

人間が世界の改革、更に自然の変化に参加できるとする当時の願望、風潮に対してHardyは自然は人間に安らぎを与える為に存在するものではないという事実を認め、人間社会や自然の変質、衰退を「取り戻すことの出来ぬ損失」として諦観する。この諦観は、Hardyの故郷よりの別離、キリスト教的超自然主義に対する疑念、失敗と思われる結婚、建築技師としての挫折にその基盤を求めることが出来ようが、小説との訣別、Emmaの死という2つの大きな事件の後、1912年—13年に創作された数々の詩の中に見うけられる作家自身の魂の救済に相通じるものがあり、そこには虚無、懐疑、厭世に身を沈めず、

現実離脱の方向にも目を向けなかった作家としての強い自意識を認めることが出来よう。

Ignorant of what there is flitting here to
see,
The waked birds preen and seals to flop
lazily;
Soon you will have, Dear, to vanish from
me,
For the stars close their shutters and
dawn whitens hazily.
Trust me, I mind not, though Life lours,
The bringing me here; nay, bring me here
again!

I am just the same as when
Our day were a joy, and our paths
through flowers. 注(1)
理念と現実の隔絶に苦しんだ後に絶対の過去性を認め、「もう一度誘って」と訴える生の肯定がこの詩の中心である。時間の空しい嘲笑を退け、全ての想念をもって現在と自分の全生涯を結びつけようとする強い意志を感じることが出来る。

こうして自然主義的哲学から知的にも情的にも自由になった晩年のHardyの姿は、'return', 'redemption', 'restoration'の世界を追求し人生に対する知的理解と言える厭世主義、不道德性を前にした若きHardyとどう関連するのであろうか。

上記の'salvation', 'regeneration'に結びつく'Far from the Madding Crowd'と'The Return of the Native'の2作品をその叙述の技法、効果、言語構造とその情意的要素の面から考察し、作品の基盤に一貫して流れる内部構造を検討することによりHardy文学の一端に触れてみたい。

2

S. Ullmannは表現性の要素として 'emotive overtones', 'emphasis', 'rhythm', 'symmetry', 'euphony', 'evocative elements'等を挙げ、作家は著作という作業に於いてその要素のいずれかを選択すると述べている。注(2) 我々はある発話者の姿勢を表層的なlexical levelによって知ることが出来るが、文学作品の考察に於いては単なる表現の選択や技術だけではなく、作品全体の構造、統一性にまで検討の範囲を拡げなければいけない。作家の思想や精神が作家固有の表現形式として顕著に現われる指標を土台にして作品全体を支配する潜在的な「文体」

を把握すべきである。只、作家の側からはこの文体は無意識のうちに生まれる場合が多く、その文体を知る為には読者の側の意識的な作業を必要とする場合が生じる。その場合、ある言語指標の文体的効果は推測出来てもその指標がその作家の文体として固有のものに定着しているかどうかの判断はむずかしい。

Hardyのように当初からその文体についての評価が流動的な作家の場合は、特定の描写における文体的確さ、明快さを言語事実によって確認した後でその構造を支配する精神を考察するのが最良と思われる。

'Far from the Madding Crowd'は善良な農民精神と現実意識を持つGabriel Oakが決して自然に支配されぬ主体性のある人間として生きる姿を描く小説である。彼と自然の類似は、

It was a featureless convexity of chalk and soil—an ordinary specimen of those smoothly-outlined protuberances of the globe which may remain undisturbed on some great day of confusion, when far grander heights and dizzy granite precipices topple down. 注(3)として第2章に描かれる。文体語彙として考えられる'an appreciative spirit', 'deliberateness', 'speaking loneliness of the scene'等が見出されるこの章の前半はこの作品全体の内部構造を示す部分として重要である。冬至の前夜に野に立つOakの上を北風が荒涼と吹き、'the regular antiphonies of a cathedral choir'として天に舞い上る。満天の星はOak自身の肉体の鼓動のように瞬き、眠りに現を抜かす文明化された人類の上を静寂のうちに通過する。ここに喚起されるHardyの知的な要素は40年後における'At Castle Boterel'の破壊的な「時」を超越し、時間からも空間からも解き放たれた人間の姿に共通するものがある。

And to me, though Time's unflinching rigour,
In mindless rote, has ruled from sight.
The substance now, one phantom figure
Remains on the slope, as when that
night

Saw us alight. 注(4)

人類を取り巻く万物は流転し、その1つの瞬間がHardyの胸の中に不変の記憶となって残る。Oakの胸に日常の時間の感覚を越えた1つの秩序が形成されたように、この詩人は既に現実の世界からは消滅したが充分リアルである1つの瞬間を感得している。

Oakを中心に据えてこの作品を考えるなら、決してBathshebaの魂の救済、変貌というテーマではなく、人間の意志によって支配される部分と宇宙及びその内的意志の括抗、そして人間がその過程及び結果に見覚める姿が作品の基底にあることに気付くであろう。Oakは自然の大きな営みを、ほぼ無関心、無感動で見守り、人間の我や欲望に訴えることは結局は罰と苦しみを受けることになることを熟知する。OakとBathshebaが暴風雨の中で作物を救う努力をする場面、Fannyが奇妙な犬に導かれてCasterbridgeに向う場面、Troyの激怒の後で森に逃れたBathshebaが朝を迎える場面等は全てHardyのこの認識から創造された箇所である。その何れも自然を己れの不動の世界の中心として意識する人間とその対象とされる自然の調和が時には観念的に生硬なままの語句で綴られるが、非情なまでに厳しい表現で読者に示めされる。そこには人間の明暗の二重性を見守る詩人Hardyの心の複雑さが感じとられるであろう。

OakとBathshebaに襲いかかる稲妻は‘the spring of a serpent’, ‘interwined undulating snakes of green’ と蛇のimageが ‘a perfect dance of death’ となって浮び上がるが、同時に ‘phosphorescent wings crossing the sky’ という崇高な美の意識となって2人を圧倒する。

Fannyは ‘the acme and sublimation of all dismal sound’ を耳にしながら人気の無い栗の並木路の濃い暗闇の中を彼女には触覚でのみその存在を知る犬に助けられながら枯葉のように動き廻る。

一方、Troyに ‘You are nothing to me—nothing’, と侮蔑に満ちた言葉を浴びせられ、野に逃れたBathshebaが一夜を明かした後、冷静に目覚め、自分の存在が一変したことを悟るのは ‘a fulsome yet magnificent silvery veil’ という相反した2つの自然の中であり、自分を救いに沼を涉って近づくLiddyの姿も「じめじめした地下を思わせる仄かな香りを持つ紅色の泡」と二重性のある表現で捉えている。

この作品を牧羊者の生活を描く文学とする根強い観点からは、田園生活と都市生活、穏健と激情、中庸と過度という図式で前者を後者の上に置く価値判断があり、OakとBathshebaの結婚をTroyとBathshebaの恋愛、BoldwoodとBathshebaの戯れの止揚とする考えに一致する。しかし作品の中心をなす表現上の技法から考察するならば、Hardyの意図はありのままの自然と対比された状況でのOak、Bathshebaという人間達が自らの悲劇的体験に気付かずまた感情の世界に没入することもなく、継起す

る内的意志を求めることにあることが知られる。そこに現実の世界があり、人間の存在があることを作者自身が認識している。その認識はEmmaを失った後の詩の世界に継続する。

And we are here staying
Amid these stale things,
Who care not for gaying,
And those junketings
That used so to joy her,
And never to cloy her
As us they cloy!...注(5)

詩人の生きねばならぬ現実を冷静な目で看取り日常生活のささやかな面に光を当てる。悲劇的な主題ではあるが、抑制された韻律によってやさしさを込めて描写される。自然の冷徹な現象を目の前にして孤立した魂の不安と渴きを覚えつつも生の充実を求める詩人の姿はNorcombe Hillに投げ出されたOakとBathshebaが「不可避なもの」の網の目の中心にありながら宇宙に生きる万物と連帯感を抱く姿に一致するものである。

一作家の文体の特異性を考察するには、その技法の必然性のみならず全体としての統一を保つ要素に結びつける必要があり、この要素が見出されない限り、‘the soul which gives the word their being’. 注(6) となる作品としての文体性は稀薄である。Fannyの墓を造り、木や花を植えたが樋の水落しに気付かず一夜の雨で完全に洗い流されたことを知るTroyの立場は解説風に現在時制で

It is seldom that a person with much animal spirit does not feel that the fact of his life being his own is the one qualification which singles it out as a more hopeful life than that of other who may actually resemble him in every particular. 注(7)

と描かれる。この長文がLevels of generality 注(8) では3つのstructural layersしか持たず、一方direction of modificationが前後している為にmain clusterの部分でその表現の意図が完了した形となり、思考され熟慮される秩序を失う。この長文を根拠としてparagraphの後半にある ‘Troy hated himself’. に至る作者の思考は構造上ことさら次元の異なる文となって表現され、そこにHardyの意識的な手法がうかがわれるのであるが、作者の視点で捉え注釈を加えるこの記述は時に常識的な観念や教訓が筋の発展に関係なく提示されるところから、作品全体の有機的なリズムを失う結果になる。

OakがBathshebaによって解雇される Chapter 20では作者の注釈に対比表現が多く用いられ、上記の例に比較してはるかに読者の知的理解に効果的な文脈が設定されている。

This is a lover's most stoical virtue, as the lack of it is a lover's most venial sin.

注(9)

A woman may be treated with a bitterness which is sweet to her, and with a rudeness which is not offensive. 注(10)

更にChapter 22の羊刈りの場面にもこの表現は受け継がれ、

Men thin away to insignificance and oblivion quite as often by not making the most of good spirits when they have them as by lacking good spirits when they are indispensable. 注(11)

と冒頭の一文からこの手法をとり入れ、語彙の対比は多数にわたっている。これは人間の感受性が本来対比的に働らく点に着目した表現で、Bathshebaの農場主としての矜持とBoldwoodの求婚を拒ける感情の相剋が巧みに織りなされる。対比表現の文脈と物語の進行に及ぼす力については、F.L.Lucasは次の様に指摘する。

Antithesis keeps an eternal youth because it corresponds to an eternal need of human thinking. The mind is perpetually balancing and seeking balance: perpetual truth lies between opposed extremes, and wisdom between opposite excesses 注(12)

語り手が作中人物と並んで作中に顔を出すHardyの作品では読者の思考に対応するこの対比表現の敏捷性と軽快な語り口がなければ、通俗、感傷に満ちた文体になってしまうであろう。この表現の効果は多くの作品で古代ギリシア劇でのChorusの役を担う農民の会話の効果と同様で、物語の進展を説明する一方、登場人物をも動かすところに現われている。上記の'a lover's most stoical virtue'や'a bitterness which is sweet to her'は一つの予言となって読者にOakとBathshebaの前途を暗示するのである。

3

言語が人間の思考、感情等を伝達し、自然の変転、人間の行為等を描写する際の限界についてはHardy

自身、'The Return of the Native'の中で、

They remain long without a single utterance for no language could reach the level of their condition: words were as the rusty implements of a by-gone barbarous epoch, and only to be occasionally tolerated. 注(13)

と述べているが、これは小説技法の上ではP. Kramerが'under-characterization'(14)と名付けるHardy小説の1つの問題点に通じている。意識的に用いた手法か、或は結果的に人物像や人物の心理を読者の想像に委ねることになったものかを考察する必要があろう。それは、客観的な動きの中に作者の個性を注入しようとする一般的な志向と、言語をその対象物の象徴としてよりむしろ言語自身の為を使用しようという魅惑を前にした作家が言語の創造的な機能のどの一つに注目して描写の統一を目指すかを検討することにもなるであろう。

例えばEustaciaが「金輪際動くことのない総体の有機的な一部分」になりきっているChapter 2の後で再び姿を現わす場面は

...her form being wrapped in a shawl folded in the old cornerwise fashion, and her head in a large handkerchief,... 注(15)

と描かれ、この女性の様子が'not superfluous at this hour and place'としながらもその必然性が明示されず、風の音に耳をすます彼女がやがて頭巾を少し後ろに押しやる場面でもSapphoとMrs. Siddonの名を挙げてEustaciaが'an image like neither but suggesting both'であると読者の想像にまかせてしまう。Egdon Heathの背景とEustaciaという異教神の素材を思わす女性との対照の中に、読者の連想作用によって1つの幽玄な調和を構築しようとする試みである。事実、Eustaciaが読者の前に完全な姿を現わし、その容貌が描写される個所でもこの手法が繰り返えされ、身体つきでは'without ruddiness, without pallor'であり、眼は'Pagan eyes full of nocturnal mysteries'唇は'the curve so well-known in the arts of design as the cimareta or agee'と夫々の実体の周辺を描く外面的描写であり、状況の描写というよりむしろ論理的な構成を持つ説明となっている。

この'the margin of the unexpressed'はHardy自身の用語では'a series of seemings'である。一人物、一場面という孤立した構成要素を相互に作用し合う全プロットの過程を形成する¹¹⁾一形態とするなら、潜在的で自由で動的な言語自身の展開によって

生じる力は先行する要素と後に続く要素の相乗現象を生み出し、対象の持つあらゆる性質を一つ一つ拾いあげる描写が期待できる。この小説にも屢々登場するthe observer, the onlookerにとっても読者にとってもEustaciaは初めから不透明、不明確な存在である。Eustaciaはむしろ実在のEustacia以外の姿で提示されていると言えよう。作者が物語の随所に姿を見せ、語りの様相が変転激しいHardyの小説では著者が人物に意識を注入するのか、人物と背景を交流させるのみなのか判然としない場合があり、Hardyの意図はこの点に関してはheroicであるよりも‘mock-heroic’⁽¹⁶⁾に沿っており、人物は他の人物との対比においてのみ実存的色彩を帯びた形で提示される。

一方、‘Far from the Madding Crowd’においては人物の行動、思考がやや前面に押し出されている点に注目しなければならない。ここでは宇宙の‘the Immanent Will’に影響を受けるとは言え、人間の主体意志が中心に置かれ、作者の倫理性が明確になっている点で作品の主題そのものと思われるEgdonの森にまるで汚点のように姿を現わす人物が描かれる‘The Return of the Native’とは範疇を異にするからであろう。

‘Description of Farmer Oak’と名付けられる冒頭の章では主要人物であるGabriel Oakの姿が遠慮なく大寫しにされ、直接的な描写となっている。

When Farmer Oak smiled, the corner of his mouth spread till they were within an unimportant distance of his ears, his eyes were reduced to chinks, and diverging wrinkles appeared round them,...注⁽¹⁷⁾

しかしこのOakをan espial役にして朝の明るい陽射しの中に描かれるBathshebaについては外面的描写が見出され人物の動的な映像によって物語の進行を促すこの一篇の構成に若干の齟齬を来している。Bathshebaの様子を描写するに‘geraniums, myrtles, cactuses’⁽¹⁸⁾という植物、‘a cat, a caged canary, sparrows, blackbirds’⁽¹⁹⁾という小動物に読者の目を集中させ、読者がこの対象物に対して持つimageを通して彼女の容貌、気質を創造する手法を採用する。この小説がCornhill Magazineに連載直後のWestminster ReviewでBathshebaとGeorge Eliotの‘Adam Bede’におけるHettyを比較検討⁽²⁰⁾しているが、表現手段から考えると上記の論になると思う。当時Hardyは人物の心理を細部にわたって描写する方法に組せず、人物の行動、

自然の変化等を場面構成の要素とし、心理描写によって文の主流が失われてしまわないように努めた。その結果、文章表現の上で澄明性や平明性が期待できなかった一方で複雑な文構成にもなっていないという不可思議さを生み出し、それが彼の文体上の一つの特徴となっている。

人物の心理の内面を直接描写せず人物の行動や自然の様子を描くことによって読者に人物の内面を理解させようとするこの方法には一つの危険性が潜んでいると言わなければならない。

She went stealthily as a cat through this profusion of growth, gathering cuckoo-spittle on her skirts, cracking snails that were under feet, staining her hands with thistle-milk and slug-slime, and rubbing off upon her naked arms sticky blights...注⁽¹⁹⁾

Alecとの忌わしい出来事の後、新しい農場に働くTessが草地を横切る場面であるが、この外面描写によるとこの悪臭をはなつ雑草の粘液をべたべたつけた状態であり、泡吹き虫の泡、踏みつぶした蝸牛、あざみの乳液、なめくじの粘液、ねばねばした胴枯れ病の菌などに不快感を抱く読者は、Tessも当然ながら不快感にとりつかれると考えてしまう。しかし「自然と共に生まれた」Tessはこの場面では自然のこの迸出物をむしろ心地良く感じとり、Angelと共有する世界に近づいて行くのである。

同様に「実り多き」という意味の名前を持ちながらEgdonの森をその閑と単調な持続性の故に嫌ったEustaciaがその地を立ち去ろうとする夜は、

Skirting the pool she followed the path towards Rainbarrow, occasional stumbling over twisted furze-roots, tufts of rushes, or oozing lumps of fleshy fungi, which at this season lay scattered about the heath like the rotten liver and lungs of some colossal animal
...注⁽²⁰⁾

と、ねじくれた金雀枝の根、巨大な動物の腐敗した肝臓や肺臓のような厚ぼったい茸の塊などに悩まされながらEgdonを捨てようとする。当然この描き方からEustaciaはこの地に生息する動物、植物を嫌悪に満ちた心で受けとめていると考えられるのだが、実はこの時こそ彼女が初めて‘the chaos of her mind’⁽²¹⁾と‘the chaos of the world without’⁽²²⁾が完全な調和を保っていることを悟った美しい一瞬なのである。これも文章の表層構造と人間の内面の変化が破綻をきたしている例であろう。

更に、全ての比喻も寓喩も鳥に始まり鳥に終るとされるThomasinの描写でも赤ん坊を抱いて雨の中に飛び出して行く描写⁽²¹⁾では、'demons in the air', 'malice in every bush and bough', 'scorpions', 'monster'と描かれる雨は現実的な不便と不安を与えるものであるが、彼女には単なる'prosy rain'であり、荒野も単なる'a windy place'であるという結論に達している。

以上の例のように読者を困惑させる場合もあるが総体的に見てHardyのこの外面描写は着眼の良さに助けられ、人物の背景と情況の統一、事件の進展に適した手法であると言える。言語の表現形式とある時代に日常使われている言語で伝達される意味の関係は必ずしも一定したものでなく、作者は芸術的形象を伝え得る関係を選択することになる。その為、読者が作者の意志とは無関係に自分自身のimageを形成することもあり得るわけで、その場合作者に読者の形成するimageと作者が事実から受けた感情を出来るだけ合致させる技術が必要となろう。Hardyはこの自律性を持つ言語に裏切られるのを避ける為に、自らの小説の中で実験的にある表現を多用することを試み、独特の文体に到達したのであろう。

4

Hardyのsimileとmetaphoreに関しては初期の作品について既に疑問を抱く論があり、中でもSaturday Reviewの無記名の論評は'Far from the Madding Crowd'について無理な比喻表現を避け、素朴な題材に合致する単純な文体をとるべきと忠告し、更に、'The Return of the Native'でも忠告が生かされていないことを知り、比喻が'often strained and far-fetched'であると指摘する。⁽²²⁾ところが後年においてはH.C.Duffinの如く

They (similes) arrest the attention and excite admiration by something as near as prose can go a very felicitous and original illuminating power, combined with complete precision or appositeness in all parts of the comparison. 注⁽²³⁾

と激賞してやまぬ論もあり毀誉褒貶が定かではない。simileとmetaphorの区別は本質的なものでなく、一般の言語と文芸作品の言語に現われる場合もその間に大きな差異は認められないであろう。その大部分は普遍的な類似という図式から生まれたものであるが、作品の構造にかかわる比喻、特殊な機能

を果たす比喻がみられることに言及したい。

最愛の息子ClymがEustaciaとの結婚を前にして家を離れた翌日、茫然自失に近い状態のMrs. YeobrightにThomasinが訪ねてくる。Thomasinの様子は鳥のimageを用いて美しく描かれる。

When she was musing she was a kenstrel, which hangs in the air by an invisible motion of its wings,... When she was frightened she darted noiselessly like a kingfisher. When she was serene she skimmed like a swallow, and that is how she was moving now. 注⁽²⁴⁾

このpassageの中核に働らく作者の言語統御力は見事でThomasinの人柄が鮮明に浮び上がる。と同時にこと部分が一つの場面転換の働らきをし、Mrs. Yeobrightは悲歎を超えて自らの人生を'The more noble, the less wise'.と悟る心の余裕を持つに至る。更にこの比喻は、Egdon脱出が叶わぬEustaciaによって決行される魔女狩りの祭式を象徴する入水と対照的な表現となっている。更にMrs. YeobrightとClymの2人が互いに重大なある事実に対する誤解から険悪な仲になる経緯を重苦しい気持で見守らねばならぬ読者は、この数行の等質的な記述に作者の深い感情表出を読みとり安堵することが出来る。

Hardyの用いた比喻の中では人名や地名を借りたもの、神話や歴史的事項に言及したものは安易な類似性に基づくものが多く、例えばWildevを描写するに当っては彼が困難なものに憧れ、遠きを求める感情家であることを'He might have been called the Rousseau of Egdon'.と述べたり、自分の母を見殺しにしたと自己嫌悪に陥るClymの姿がEustaciaには'as dreadful to her as the trial scene was to Judas Iscariot'に思われたりする比喻は単に読者との共通の言語体験から生まれる標準的な語で非標準的な認識を表現しようとするもので、説得性という機能は充足しているとは言え、作品の構成にかかわる要素は見出されない。

一方、決して特異な類似性に基づくものではなく単なる現実認識と思われる比喻の中に全体のテーマや構成にかかわるものが見出されるのは興味ある事実である。

身振り狂言で身代りになりEustaciaがClymに近づくの助け、更に祭式の篝火を焚いて彼女のEgdonからの脱出の引金を引くCharleyが敬愛する女主人の一房の髪をClymの手より受け取る場面は、

Yeobright searched¹¹¹ his desk, and taking out a sheet of tissue-paper, unfolded from

it two or three undulating locks of raven hair, which fell on the paper like a black-stream. 注⑤)

と描写される。この終局に近い一節の中核は官能的なEustaciaの髪を‘when her hair was brushed she would instantly sink into stillness’ と描き、不気味なEgdonの森と対照的な美しさを具えた‘the raw material of devinity’ と描くことに照応したものであり、そのEgdonの森に永遠の硬直の姿で横たえられた彼女の髪は‘looser now than either of them had ever seen it before, and surrounded her brow like a forest’ と彼女も結局はEgdonの森に帰着する存在であることを示すものである。ClymとCharleyの描写が特殊な状況を構成しようとする意図を持つ一方でその描写内にあるこの比喻表現は、一つの類似を形成し逆に他の部分との同化を生み出すに至る。この内的な同化の方向を持つ一連の比喻の機能についてS.Ullmannは次のように指摘しているのである。

With these dynamic developments we have already moved from the plane of single images onto that of the patterns into which they combine. The most significant of these patterns are those where the same images, or variations of them, reappear like a Wagnerian leit-motiv wherever the author mentions the experience which had originally called them forth. 注⑥)

比喻表現が一作品の中に必らずしも均質に現われず、ある緊張する場面、作者の思考が複雑になる個所に頻出することを考えるなら、この表現が作品構成の上にある役割を持つことが知られる。このように比喻表現を作品の構造と関連させてみるとHardyの文体の基調の一つを知手がかりが得られよう。

5

作家の想像力の軌跡の追求は文体が作品中に形成される過程を知ることによって可能となる。本論では作品のテーマと技法という系列の考察よりむしろ不可視的な作家の精神が表出された作品上の指標とその作品構成上の効果を考察して論を進めてみた。

‘Far from the Madding Crowd’では幸福な結末によって悲しい出来事が全て浄化され救済される経過が外面描写、対比、比喻等によって読者の想像の目に合わせつつ展開する。Hardyの思考の中核

をなす‘the President of Immortals’注⑦) はこの小説では「偶然」、「自然」、「社会」等の具体的な形態でWessexの世界を創造しその世界の中でOakやBathsheba達が主体意志を持ちながら結果的に、‘the Immanent Will’によって引きずり廻されてしまう形にしたHardyの不条理は彼自身が‘a proportion of the total will in each part of the whole’の‘each part’であり、‘the Immanent Will’から生み出された知性を備えた人間であった何よりの証拠であろう。

‘The Return of the Native’においても小さな事件がある因果関係によって重大な事態に変わるといふ一定の枠が支配する。この形を具象化する手法として前作と同様に外面描写、対比、the Bibleよりの比喻表現や古典へのallusionを骨組として知的な均整のとれた警句を随所に折り込み、善意に満ちた人々が小さな必然によって仮借なく誤解と錯誤の世界に入り込む物語が展開する。ここでもBlind Powerは時には人間に対して悪質とも思われる程に鮮明になるが、物語が展開される動的な過程を考察するならばそのPowerも実は個人の魂に生起する事象の映像に過ぎないとする作者Hardyの意図が感じられるのである。

(注)

- (1) Thomas Hardy, “The Complete Poems of Thomas Hardy,” (Macmillan, 1975) P.349
- (2) Stephen Ullmann, “Language and Style,” (Basil Blackwell, 1964) P. 101
- (3) Thomas Hardy, “Far from the Madding Crowd,” (Macmillan, 1975) P. 46
- (4) “The Complete Poems” 上掲書 P. 352
- (5) Ibid., P. 344
- (6) J. Middleton Murry, “The Problem of Style,” (Oxford University Press, 1967) P.15
- (7) Far from the Madding Crowd, 上掲書 P.325
- (8) Francis Christensen & Bonni Jean Christensen, “Notes Toward a New Rhetoric,” (Harper & Row, 1967) P. 29
- (9) “Far from the Madding Crowd” 上掲書 P. 158
- (10) Ibid., P. 159
- (11) Ibid., P. 169
- (12) F. L. Lucas, “Style”, (Collier Book, 1967) P. 231

ハーディ小説の文体的特徴

- (13) Thomas Hardy, "The Return of the Native", (Macmillan, 1975) P. 211
- (14) Dale Kramer, "The Forms of Tragedy", (Wayne State University, 1975) P. 61
- (15) "The Return of the Native" 上掲書 P. 77
- (16) Ian Gregor, "The Great Web", (Faber and Faber, 1974) P. 86
- (17) "Far from the Madding Crowd" 上掲書 P. 41
- (18) R.G.Cox, "Thomas Hardy;Critical Heritage", (Routledge & Kegan Paul, 1970) P. 34
- (19) Thomas Hardy, "Tess of the d'Urbervilles", (Macmillan, 1975) p. 150
- (20) "The Return of the Native" 上掲書 P. 356
- (21) Ibid., P. 365
- (22) "The Critical Heritage" 上掲書 P. 40
- (23) H. C. ダフィン (山本文之助訳) トマス・ハーディ論 (千城, 1978) P. 251
- (24) "The Return of the Native" 上掲書 P. 226
- (25) Ibid., P. 402
- (26) Stephen Ullmann 上掲書 P. 184
- (27) "Tess of the d'Urbervilles" 上掲書 P. 420